

たより

『美紗の会』 ニュース 第38号

平成十三年十一月七日

発行者 「美紗の会」
03-3441-2726
編集責任者 大久保 朋子

美紗の会随想

西松布 咏

山のあなたの空遠く辛い住むと人の言うー 学生時代に口ずさみまだ見ぬ世界や人々を夢見たのは、昔のこと。今は空の果てで、いつ終るとも知れない戦いが続いていると思うと、澄みきった秋の空が物悲しい。そんなことを思いながら第二十二回美紗の会おさらい会が十月十四日龍名館において開催された。

今回は生憎五人の欠席者があつたが、いづれも楽しんでお客様も多くなり、幕あきは、いつものように首を傾けながら、ご愛敬の会主の母の第一声。続いて入門二カ月余りの大型新人川崎さん。

京都の染色家を父に持った環境ゆえか絵画にひかれる本郷さん。唄も美しい色彩を好み、「あじさい」で着物姿の佳人を。狩野山楽の襖絵を描いた「牽牛花」を清らかに唄い、師匠作詞作曲の「霧」では少々脱線しましたが朗々と唄い拍手喝さい。いつもひょう／＼とした粹人岡崎会長。持ち前の器用さと努力で三味線を弾きこなし、相棒の小高さんと「四季の唄」を。

姿で、遊女の哀しみを唄った「今朝の雨」三味線も唄った前努力で、ますます上達しツレ弾きや長唄で大活躍ありあまる美声を絞ることを覚えた川辺さん。日頃は数々のお役目をこなす忙しさですが「箕輪心中」では、しつとり切なく殿様と遊女の色模様をたつぷりとし、細井会で声すつかり唄心が身に付いて声に張りや艶が出てきた鈴木さん。三味線は、いつもコンビの竹澤さんの唄で「館山節」を。唄は「我がもの」と「夏の暑さ」で女心を切々と。何事にも熱心に取り組む大久保さん。今回の唄「にぎりえ」にさせて樋口一葉を読み返したとか。その努力が実り、見事に悲劇のヒロインの哀れが浮き彫りに。

草つばらに真つ白いふとんが丁寧な折りかさねられて、積みである、向こうには地平線と空が広がっている。それは今でも空地があれば誰でも撮れる写真なのかもしれない。その画面自体に深い意味はおそらく無い。でもそれが太平洋戦争のさなかに作られた作品だとすると、心の中をすつとくすぐられた感じがする。

ただ、師匠が唄い始めると会場は、まるで違うものが立ち上ってきた。詩の意味でもなく、作者の思い出でもなく、詩人達と空気の震えとして通底する音。暑い長い夏の後の涼しげな秋の日の夕方だった。

（九月九日、東京ステーションギャラリー開催会期中に、美紗の会会員青山正子さんの青山コンサルトアンサンブル主催で、渋谷マークシティビルにおいて行なわれました。）

今回の生憎五人の欠席者があつたが、いづれも楽しんでお客様も多くなり、幕あきは、いつものように首を傾けながら、ご愛敬の会主の母の第一声。続いて入門二カ月余りの大型新人川崎さん。

京都の染色家を父に持った環境ゆえか絵画にひかれる本郷さん。唄も美しい色彩を好み、「あじさい」で着物姿の佳人を。狩野山楽の襖絵を描いた「牽牛花」を清らかに唄い、師匠作詞作曲の「霧」では少々脱線しましたが朗々と唄い拍手喝さい。いつもひょう／＼とした粹人岡崎会長。持ち前の器用さと努力で三味線を弾きこなし、相棒の小高さんと「四季の唄」を。

姿で、遊女の哀しみを唄った「今朝の雨」三味線も唄った前努力で、ますます上達しツレ弾きや長唄で大活躍ありあまる美声を絞ることを覚えた川辺さん。日頃は数々のお役目をこなす忙しさですが「箕輪心中」では、しつとり切なく殿様と遊女の色模様をたつぷりとし、細井会で声すつかり唄心が身に付いて声に張りや艶が出てきた鈴木さん。三味線は、いつもコンビの竹澤さんの唄で「館山節」を。唄は「我がもの」と「夏の暑さ」で女心を切々と。何事にも熱心に取り組む大久保さん。今回の唄「にぎりえ」にさせて樋口一葉を読み返したとか。その努力が実り、見事に悲劇のヒロインの哀れが浮き彫りに。

草つばらに真つ白いふとんが丁寧な折りかさねられて、積みである、向こうには地平線と空が広がっている。それは今でも空地があれば誰でも撮れる写真なのかもしれない。その画面自体に深い意味はおそらく無い。でもそれが太平洋戦争のさなかに作られた作品だとすると、心の中をすつとくすぐられた感じがする。

ただ、師匠が唄い始めると会場は、まるで違うものが立ち上ってきた。詩の意味でもなく、作者の思い出でもなく、詩人達と空気の震えとして通底する音。暑い長い夏の後の涼しげな秋の日の夕方だった。

（九月九日、東京ステーションギャラリー開催会期中に、美紗の会会員青山正子さんの青山コンサルトアンサンブル主催で、渋谷マークシティビルにおいて行なわれました。）

「腹の立つ時」を。そして入門五カ月の青山さん。普段は、さつそうと髪をなびかせ三味線をギターのようやマンドリンで鍛えた音感で「縁かいな」の唄はもろろん、アップテンポの「奴さん」「なすとかぼちゃ」を弾き語り衝撃のデビュー。前回は、入門二カ月で無我夢中でデビューしてしまつた稲生さん。今回

裕の唄いっぷりでした。赤坂クラブの幹事山本さん。仲間が、ちよつと挫折の淋しさも何のその「うかれ磐梯」で景気をつけ「湯上り」では旦那を待つお富の仇つばさを。山中時雨では、難しい山中節を山本節で、たつぷりの名調子。唄うのは苦手とはにかむ山根さん。しかし継続は力なり！「花は上野」を軽妙に弾き語りし「香に迷う」では師匠をたつぷり唄わせる上達ぶりを披露。

若い人がドン／＼上達されて、とベテラン増田さん。いつも変らず三味線に唄いの精進ぶりは、まさしく会のお手本です。今回は「川竹」「うかれ磐梯」の替手を。唄では「粹な浮世」「蚊帳売り」を洪いので健在ぶりを。念願のお孫さんが生まれくるな顔がいよ／＼柔和になつた佐久間さん。

その唄声は、いまだ衰えず大久保さんの替手で「春がすみ」本番では、美紗の会初演の「千両職」「別れ雁」で見事な唄いっぷり！。お酒をぶつぷり止めた小高さん。飲む程に酔う程に唄がのこのこの素人はなれしてますます聞かせる唄に。今回は千寿文師が踊つて下さるとあつて緊張気味でしたが、「あじさい」があでやかな踊りとマッチしてヤンヤの拍手。いつも洪いのを聞かせて下さる竹澤さん。春日の早間小唄をきつちりと精進なさり、ピ

リツとした味わいの「我が住家」「夢の手枕」をご披露下さいました。毎回何があつても駈けて下される三枝師菊音さん。今回も「晴れて雲間」「心して」でたつぷりと乙なのどを。濃厚な人柄と、いぶし銀のように練り上げた内藤さんの弾き語り。その洗練された風格が深い、相撲甚句の入った「勝名のり」、さらりとした味の「村がらす」に、美紗の会一同ただ／＼うっとり。

かくしてそれぞれの個性豊かで楽しい番組がおなじみの加藤さんの明るく軽妙な司会に乗って練り広げられ、名物の長唄「都風流」も深夜の強

山本惇右展 スライドレクチャーによせて

三雲 謙

ドレクチャーの最後に師匠が、惇右の詩、そして同じシユールレアリストの北園克衛の詩に曲をつけて演奏された。会場には生前の惇右氏と親交の深かったVOUの仲間、白石かず子、清水雅人、岡崎克彦氏の方々も混じり、詩を朗読し昔に思いを馳せているようだった。ただ、師匠が唄い始めると会場は、まるで違うものが立ち上ってきた。詩の意味でもなく、作者の思い出でもなく、詩人達と空気の震えとして通底する音。暑い長い夏の後の涼しげな秋の日の夕方だった。

「交差していく時間軸」 九月二十一日、 第三回ニューアンスの会

ヤリタミサコ

青山マンガラは、地下の隠れ家のようなたたずまい。宇宙人や妖怪や未来人のように時間も空間も自由自在、容易に飛び越える人たちが素知らぬ顔で集まってくる。

第三回目とあって、なお一層カゲキに、それもさりげなくカジュアルにラディカルといふところがポイントだ。ひとことも二ホンゴをしゃべらないくせに饒舌なピアノの渋谷毅さんと、祈りのポジショナを舞踏家成瀬信彦さんが、さりげなくはげしい！伊原通夫さん製作の卑金属オブジェが舞台上方に展示されていて、これとくとき激しく反射光を向けてくる。

谷川俊太郎さんは、カゲキなアヴァンギャルドTシャツ詩集(ジョン・ソルトさんの編集)を着て登場。「二十億光年の孤独」は、今聞いても古びない。もう五十年前の作品のはずだが、「万有引力」とはひき合う孤独の力である。

前口上
小唄は江戸のロック、とは田中優子姉御の至言だ。
姉御にそう言わしめたのは、西松流の布唄姉御だった。
なにかの雑誌のインタビューで、その布唄姉御が語った言葉を、うる覚えだと思いついてみよう。姉御が厚意で送ってくれた雑誌を、生来の整理不順、のゆえに探し出せない。
だから誤解もあるかもしれ

る」といったフレーズは、二十一歳の俊太郎青年の心でもあり、七十歳の俊太郎青年の心でもあり、そして、聞く人たちの心に共鳴するフレーズだ。谷川さんの新鮮な好奇心のみならず、その場の空気をリフレッシュする。心の深呼吸ともいえるべき詩の言葉たち。

浅葉克己さんは、還暦の赤いちやんちゃんこ代わりに、ひびのこずえさん製作の透明な首まわりトゲトゲオブジェを身につけている。へちまこ火星人といったカッコウ。なんとも力の抜けたトータ。帽子をチャイニーズ風に取り替えて、とっておきの南京玉すだれのかくし芸も、客席に「こんなにはたな玉すだれを見たのは初めてだわあ！」と感激させる始末。するどくトリックスターなんです。

待ってました、の西松布唄さん。改めて言い切らぬばならないほど秋がびつたりの人だ。「秋の夜」という歌沢の

ないが、誤解とは理解の二形態だと開き直る。
「小唄の詞の少なからずが男によって書かれたと知って唄うのが楽になった。」
姉御の言葉は、何気ない。けれども何気なさにつられて、誤知りに傾く輩とは……とりわけそれがへ男なら、あまり近づきになりたくない。にわかにならざる鈍感さが、何気なさで隠された、なげな

鈴城雅文

曲の出だしの声の、ゾクゾクする伸び。キラキラとした情熱ではなく、静かに熟した熱といたたらわかるだろうか、満月の月とともに思う人待つ心とは、じんわりと熱く、かつ、持続する熱だ。

時間軸を横軸にとつてみると、ここで歌われた歌は横に伸びる歌である。歌は短時間で縦に伸びている。歌では、キリスト教会で歌われる讃美歌。ゴシック建築自体が神の高さに伸びていこうとする運動性の表現だし、そこでの祈りの歌も高い方向へ伸びていき、短時間で上昇する瞬間的恍惚だ。ぱっと熱してぱっと日常に戻る。これに対して、秋に人待つて、何年何十年の夫婦愛(「声刈」という地唄がそうだった)の機微を歌うことは、じわじわと熱く触れた瞬間は熱く感じないが低温火傷のように長時間に渡つて作用する、横の時間軸に沿つて伸びる熱の歌だ。

そのような横に伸びる歌も歌えば、もう一方では、山本悍右のシニールな詩も歌う西松さんの。北岡克衛の詩を曲にした作品もあって、これも「ジャコメッティの青銅の……」という不思議な歌いにくしの謎／毒に気づく、その機会は永劫になさそうだから。

語られた言葉を、裏側から読む。すると男が書いたと知るまで姉御には歌うたことの方がつき纏つていくはずだ。浮かびあがって来たはずだが、どんなならさなのかな？ その問いを姉御に向ける馬鹿は、頬を張られる覚悟が必要だ。ほのめかしつつ姉御はインテリヴェアにすらも、みごとな完全黙秘を貫いているのだから。

いコトバを三味線にのせてしまっている。今回も山本悍右のフレーズ「単純の一枚の／不器用なピアノ」を、力技でねじ伏せている。ナンタ「ピ」「ア」「ノ」とスタントカーのようにはいじっているのだ。えっ、それ何？？？

？と思った瞬間に歌は終わる。聞き手には、まさにシニールな残響として切断された驚きが残り、エポケー状態のまま宙吊りにされる。
ピアノと舞踏と三味線とことばたちは、秋の夜の青山でマンガラを織り成していた。江戸のアヴァンギャルドから伸びてくる時間軸、昭和のシニールレアリスムから発するシニクなイメージの流れ、原始的な身体の時を顕現させる舞踏、いくつもの軸が交差しからみあいながら。

天職として姉御は、唄を唄ってきた。ある名指し難いつらさを、心のどこかに感じながら。もしかしたらそのつらさを、姉御は持て余していたかとも知れない。しかし、唄を捨てることは、なかった。なぜか？

こと新たに強調するのは、失礼の極みだが、姉御は

誰かがそう告げたとき、不明だったつらさの理由は、ようやく姉御に明白になった。ふた筋の路が、目の前に、見えていた。

「男」に捏造された(女)を唄われる義理は、(女)の自分にはないと、唄を拒絶する路が一方にはあったはずだ。けれども姉御が選んだのは、もつと狭そうでも、もつと險しそうな別路だった。いわば毒に毒を差し向ける……姉御はその路に賭けた。

「男」に捏造された(女)を受け容れたと見せかけつつ強いた(男)が想像だにしないかいた深みにまで、像として(女)を深化させ徹底してみせること！
三味線を抱えた、孤独なゲリラは、坑道を掘り進んだ。坑道ではなく、無防備な背中がたち現れるはずなのだ(？あぶねえ、陰の声)。

小唄は江戸のロックという一言を冒頭に借りた。借りは返済されるべきだ。みごとな言葉に嫉妬して、くやしきまぎれの駄言を、最後に対置してみる。
ブルーズは、亜米利加の、小唄である。いつてはみたものの……双方を比較音楽学的に語る素養は持ち合わせていない。だから、あてずっぽうを書いておこう。

好みとしてはベシー・スミスなのだが、ここでは論旨にちながり、ピリー・ホリデイに注目する。なぜ稀代の女性ブルーズ・シンガーの名が、(男名)ブルーズであったかを考えてみたいのだ。たぶんそこから小唄とブルーズの類縁性を、いくらかは遠望できるのではないかと期待しつつ。

男名で呼ばれたブルーズ・シンガーの例は、花柳界とくに深川若者が、男名を名乗つたという事実と相まって、小唄とブルーズの不思議な暗合を想わせる。
「男」が捏造した(女)ころを唄う(女)を演じる女この錯綜した迷路を突き進むには、自覚的(分裂)メタモルフオースが必要だった。彼女たちの男名は、その現れの、ひとつだった。ひとつだったということとはつまり、その対極に、もうひとつの表象が想定されるということだ。でなければピリーと呼ばれた女が、他方でレディーと呼ばれた理由が納得できない。深川の女たちが男名を名乗りつつ、華美、絢爛な非日常的(女装)を必要としたかも理解できない。かくして唄はHermaproditieの神から響く。

第二十二回美沙の会も無事終わりました。
今回も楽しい会でした！
今回のたよりの素敵な記事が集まりました。
皆さん、これからも、気がついた事、感じた事等ごんどんお寄せ下さい。
秋も深まり朝の空気にも、冬の気配を感じます。さわやかな空気の中で食欲も増して困っている私です。

編集後記

久保 大久保